私たちのインド

辛島貴子

中公文庫
私たちのインド
一九八三年一月一〇日初版
一九九四年六月二五日7版
著者 辛島貴子
発行者 嶋中行雄
本文・カバー印刷 三晃印刷
用紙 本州製紙
製本 小泉製本
発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替 〇〇一一〇―四―三〇〇
ISBN4-12-200995-2
Printed in Japan
©1983

中公文庫

私たちのインド

辛島貴子著

中央公論社

表紙・扉　白井晟一

目次

プロローグ——葬送の小太鼓 7
すべて信用すべからず 24
お財布の中味 40
マイソールの町へ移る 56
マハーラージャとダサラ祭 67
次男誕生 78
ウーティへの旅——老いゆくものと滅びゆくもの 94
肉を求めてスクーターで 105
カレーライスの味 126
お客さまをよんでみたら 139
ユー・スピーク・オンリー・ジャパニーズ 153
ケーララへの旅——エメラルドの海と森の動物たち 172

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ブラーミンの暮し 184
カメレオンの毒 203
メルコテへの旅——お寺まいり 212
結婚の条件 227
水牛に乗った少年 247
牝牛をつれたミルクやさん 261
さようならホスピタリティロード 270
エピローグ——石窟のみ仏 276
あとがき 286
解説 荒松雄 289

私たちのインド

プロローグ——葬送の小太鼓

一九六九年四月十三日夜、私は初めてインドの土を踏んだ。カルカッタ。インド亜大陸の東の入口である。

学生時代から、さまざまな形で歴史の上に登場してくるこの国の底知れぬ重みと神秘的な輝きは、私のなかにどんなにか強く大きな憧憬となって根をおろしていたことであろうか。たえまない戦争の歴史と強大な帝王の支配。シヴァやヴィシュヌに代表される神々の乱舞する混沌の世界。ターバンをまいた蛇つかいの笛の音や象に乗った王様のきらびやかな行列。

もちろん、新聞や雑誌によく紹介されるように、巨大な貧困人口を抱えた悩める国、ハンセン氏病患者や伝染病の蔓延する不衛生な熱帯としてのインドのイメージもまったく持ちあわせなかったわけではないが、そういった暗い認識の方はいつのまにか心の片隅に押しやられて、私はひたすらうきうきとこの日を待っていたのであった。

とうとうインドへ来た。これからどんな暮しが始まるのだろう。どんな人と友人になれるだろうか。人々は何を考え、どんな生活をしているのだろうか。子供はうまく気候に適応してくれるだろうか……。九ヵ月になる長男を抱きながらタラップをおりる私は、井のふちにとび出した蛙

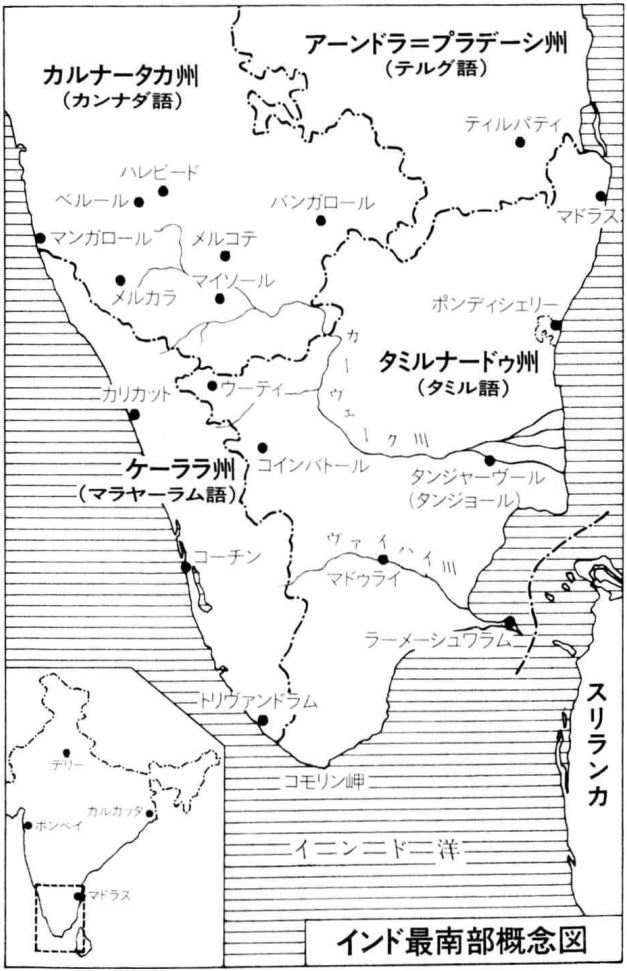
よろしく、大きな期待をおなかいっぱいにふくらませていたものであった。

けれどもこの町は、そうやって意気揚々とやってくる外国人を、例外なくガックリと絶望のどん底におとしいれてしまう残酷なる町でもあったようである。外に出たとたんにふきつける熱気に、体はたちまちじっとり汗ばんでくる。

それにしても、この空港はどうしてこんなに薄暗いのかしら。ターミナルビルに入る。なんだか国際空港というイメージからはほど遠い薄汚れた感じ。黄色っぽいライト。高い天井で、昔の映画館にあったような四枚羽根の扇風機が、ものうげに暑い空気をかきまわしている。面倒な税関の手続きには長い列ができている。下着までひっくりかえされて、ハーフサイズのカメラやタイプライターに関税をかけられて、けんめいに弁明しているらしいインド人帰国者。……でもなかばあきらめているような表情。

そんな汗とほこりにまみれた旅行者たちのざわめきの間を縫うようにして、書類とペンを持ちながら立ち働く二人のインド人スチュワーデスの美しい絹のサリーが、なんだか場違いのように優雅にも鮮やかに目に残る。足元の床を、真黒に油じみのついたカーキ色のシャツを着た男が、さも大儀そうにしながらゆっくりとふいていった。

聞きなれない言葉と英語が入り乱れるなかで一時間以上も待たされたあとで、やっと通関を終り、市内行のバスに乗る。以前からの友人であるS氏夫妻が迎えに来てくださり、ほっとする。同じ東洋人なのに、通ってきたマニラやバンコックで受けた印象とまったく異なって、インド人



インド最南部概念図

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

の集団の中にいると、妙に神経がギコギコと音をたてるような感じで落ち着かなかったからである。

「ガッカリするからね。覚悟しといたほうがいいよ」という夫の忠告を、私はいまさらのように思いだした。やっぱりだいぶひどいところであるらしい。

市内へ向うバスも、ステップは板がめくれ上り、床は波うっている。椅子の手すりは錆だらけだし、カーキ色のヨレヨレの制服をつけたむくつけき車掌は、ドアを手でしっかりおさえている。走っている時、勝手に開いてしまうからだ。そしてわびしいライトが一つだけ。舗装のしてあるハイウェイなのだろうけれど、ガタガタという音は戦車のようになりひびく。

「さっき来た時ネ、この辺で牛とジープがぶつかってネ、キャーンとひと声でいっちゃいましたよ」

S氏がうしろの席から身を乗りだして叫ぶ。

町は暗い。目をこらしてみると、ぎっしり家があるらしいのだけれど、時間が遅いせいか灯はほとんどみあたらない。それでもホテルのある市の中心へ近づくにつれて、商店の灯がチラチラするようになった。灯というのは裸電球の場合もあるし、縁日に出ている昔なつかしい屋台のアセチレンの灯もある。そして驚いたことに、それらの乏しいあかりの中で目にしたものは、道の両脇にぎっしりと材木を並べたように寝ころがる、おびただしい人々の群であった。

軒下どころではない。歩道からはみ出た手や足が車道の方にまでのびている。掛け物など何も

ない。裸で腰布だけの者、パンツ一枚の者、背中のほとんどが出るほど破れたシャツを着た者、者、者。バスが角を曲った。そしてああ、この町すじも、ゴロゴロと眠りこける貧しい人、人、人……。そして窓から入りこむ、むし暑い空気と異様な臭気。

私はじっと腰をおろしていられないくらいの不安にかられだし、思わず肩に力の入るのを覚えた。夫もいる。S氏夫妻も一緒だ。けれども、この異様な匂いにみるみる体が汚されてゆくような不安と、すさまじい貧しさのまっただ中を走っているのだという圧迫感に、私は息がつまりそうであった。

ホテルについたあと、カルカッタに長いS氏は、

「かれらみんな浮浪者ですよ、昼間はなんとか起き上ってフラフラしてるけど、夜はあの通り、道路が埋まっちゃう。この暑さじゃまだまだ死ぬな」

と、こともなげに言う。

私は、つい先ほどまでの期待はどこへやら、すっかり胸が塞がれたような気分になってしまった。日本のスラムというところも実際にみたことはないが、もちろん日本にも貧しい人々は多くいることであろう。けれどもインドの場合、貧しさなどというどころではない。人間であることができるかどうかという、ギリギリのところを問われているようであった。

「誰でも初めてカルカッタに来たら憂うつになるよ。でも、ここがいちばんインド的なところかもしれない。ぼくはこの町が好きだな」

今度で四回目の訪問である夫は、ヌケヌケとそんなことを言う。そしてインドに長くいる人は、

たいていこの町が嫌いではなくなるそうである。中国料理はたいへんにおいしいし、いろんな民族と人種が集まっている、インドでいちばん大きな町である。デリーのように取りすましたところがなく、昔々からの連綿とした民族の文化が層をなしてよどんでいるところである。ちょうど悠久たるガンジスの流れのように……。

だが果して、私にはこの町、いやインドがほんとうに好きになれるのだろうか。夫が生涯をかけて研究しようとしているインド。だからこそ余計に力を入れてすばらしいものに描いてきたインド。そして着いたとたん、すっかり私を絶望的にさせてしまったインド。好きにならなければいけないインドなのに……。奇妙なことに、その時の私は、試験勉強がなにもできていないで焦っていた時のような切羽つまった感じにおちいっていた。

それにしてもなんとまあ立派なホテルなのだろう。私は水差しを持ってきたボーイの服装の立派さに改めてみとれると同時に、あたりをみまわした。首が痛くなるほど高いホールの天井。何という様式かは知らないが、至るところにから草だのライオンだのの彫刻が施された室内。だいぶすり切れてはいるけれど、一応赤い絨毯が敷きつめてある。そして、白い詰衿の制服に金モールつきのターバンと幅広い赤のベルトをしめ、左腕に白いナプキンをさげたボーイたちが裸足で歩いているのは、お伽噺のハレムのようでもあり、いささかこっけいでもあった。そして、水だのコップだの石けんだのを持っては、入れ代り立ち代り新しいのがやってくる。

S氏は、「ぼくがたて替えとくよ」と、まだルピーを持たない私たちに代って、ジャラジャラ

と小銭をよっては少しずつにぎらせている。どうやら二〇パイサずつらしい。日本円では約一〇円である。一〇円で何が買えるのだろう。宮殿かとみまがうようなホテル。たかだか夫婦と赤ん坊が一泊するだけの部屋がいったい何十畳あるのやら見当もつかない。そして金モールに赤ベルトの立派な美しいボーイたち。裸足のかれらのせびる一〇円のチップ。何もかもがアンバランスである。

そしてその日、私は夫に子供を頼んで、レセプションの脇の両替所へ、トラベラースチェックをルピーに替えに出かけた。慣れない私が出かけたのは、日本のお役所仕事のおかげで、夫は出発に際して合法的には一銭も持ちだすことができなかったからである。つまり夫は、東南アジア諸国派遣留学生として、文部省から奨学金をもらうことになっていたのであるが、出発が四月はじめであったため、新会計年度の予算は四月末にならなければ出せないとあって、それが送金されてくるまでの一ヵ月を、妻と赤ん坊の持ちだしたドルで食べさせてもらわねばならなかったのである！　ニッコリあいそ笑いをして両替してくれた髭の係員氏に「サンキュー」とお礼を言った私は、ついてきてくださったS氏にさっそくハッパをかけられた。

「しっかりしてくださいよ！　ここはインドなんですからね。あいつ四ルピーもごまかそうとしてんですよ！」

そして氏が大声でワン・ツー・スリー……とお札とコインをていねいに数え終るや、係員氏少しもあわてず、二ルピー札を二枚ゆっくりと追加して渡してくれた。立派なスターリン髭がなんと図々しく、そしてなんとケチにみえたことか。

その日くたびれはててベッドに入った私は、町すじにゴロゴロころがる男たちの群と、金モールのボーイの裸足と、両替氏の立派なスターリン髭を頭の中でぐるぐる回転させながら、不可解なもやの中をあがくような気分のまま眠りにおちた。足元には丸太ん棒を敷きつめたような町並みが、そして高い高い彫刻のある天井では、美しいサリーを優雅になびかせた二人のスチュワーデスがはてしもなく泳いでいた。

翌朝、国内線の飛行機で飛び、正午近くにマドラスに着いた時、私は少し元気を取り戻した。昼の光の中でみると、この町の建物も道路も白く光っていて、緑の大木とさわやかなコントラストをみせ、カルカッタにくらべるとはるかにきれいに見えたからである。時折目に入る真赤な砂岩の建物の強烈な色は神経をちりちりさせたけれど、街をゆき交う人々は、昨夜カルカッタの薄暗い通りにころがっていた湿ったような貧しい人々にくらべて、心なしか明るく健康的にみえた。空気もずっと乾いているようだ。

出迎えに来てくださった副領事のO氏の車は、水色のコロナである。広い空港からのハイウェイを軽快に走り、二十分ほどで高級住宅街の一画にある氏の家に到着した。広々とした敷地に真白くぬったレンガ造りの洋館。そこここに濃いローズピンクのブーゲンビリヤが咲き乱れ、玄関先にはピンクのハイビスカスが情熱的に色を競っていた。塀の向うには、隣家のココナッツの木が見上げるように高く青い空にのびて、こぼれるようにたくさんの実をつけている。

ああ南の国だ。なんという鮮やかな世界だろう。車からおりた私は、思わず感激の叫びをこら

マドラス中央駅、市内には英領時代の名残り
をとどめるレンガ造りの建物が多く見られる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton